エミリ・デイキンスンの逆説

髙　久　真　一

1

彼女の生前，活字となつて公けにされた詩は，千五百に近い作品の中で僅か数篇に過ぎない。其の中の一篇 Success is counted sweetest は彼女の文学上の友人ミセス・ジャクスンが詞華集 *A Masque of Poets* に載録しようと，気の進まないデイキンスンを無理矢理に説得して辛うじて得たものである。此の詞華集は1878年に出版されたが，此の詩の出版について「同意した譯ではなかつたが，特にこれといつて反對もしなかつた」1) 詩人の名前は其の詩の傍には印刷されていなかつた。

當時，全くの隱遁生活の中にあつて，極く限られた友人への私信に書いた詩以外，自分の作品を他に知られることを極端に避けていた事，数百の作品の中から特に此の一篇を選んで友人に手渡した事，更に，交流伝達を拒否していた此の世に對して彼女が一体何を表明しようとしたのか等を考え合わせる時，此の一篇は異常な興味の對象となる。結果としては「作者不詳」として出版されたが，デイキンスン個人にしてみれば對世間という接触点で全く同様の選択と決斷とに迫られたことは疑いないし，数多くの作品の中から自分で一篇を選ぶ場合，必然的に自己の詩風なり思想なりの本質に密接に關連したものが求められることが考えられるからである。

Success is counted sweetest
By those who ne'er succeed.
To comprehend a nectar
Requires sorest need.　　(p.1)

(成功を一番素晴らしいと思うのは
一度も成功しない人達
花の蜜の味が分るには
欲しくてたまらぬ心が要る)

と此の詩の第一連は，実に大膽な，成功の定義で始まる。そして，第二，三連では此の定義の具体的な例として，戰に於ける勝敗を扱い，「勝利を収めて堂々と進軍を續ける兵隊達の中の一人だつて，戰に敗れ，今にも死にそうになつて地面に倒れている兵士程には勝利の意義，その感激は分つていない」という意味のことを伝える。僅か12行からなる此の短詩は，表面が極めて淡々とした詩調であるだけに却つて，その表現に到達する迄の時間的，空間的な，作者の苦澁にみちた広がりを背後に感じさせる。此の大膽，直截な一篇は此の世との交流を拒否した者の全く一方的な宣言としての響きを有つ。抒情の流動を一つも表面に感じさせない朴訥な文体，詩的専用語を完全に追放した特異な語法にもまして興味深いのは，其の端的な逆説性である。成功と云い，勝利と云い，其の意味，其の感激を最もよく識り，享受するのは，所謂成功者，勝利者なのではなく，反對に，失敗者，敗北者であると，此の詩は言う。

隠遁者ディキンスンと此の世との關係に於いて，此の詩が何を意図し何を伝えんとしているかは，説明の要が無い程，明白である。然し，一方此の逆説の詩が此の世への唯一の宣言として提示された事それ自体が逆説的な意味を有つことを見逃す譯にはゆかない。把握の態度の上では所謂此の世的な成功を否定はしているものゝ，成功に就いての詩を書く事自体が既に成功への異常な關心を示していると言えよう。「成功」或は「此の世的成功」は，かつて英米詩を豊かにしたことのある題材ではなかつた。「此の世的成功」はそれ自体，詩人の意識に上り，詩の主題となるには所謂余りにも低俗であるか，或は例え意識に上つても，意志的に詩の領域から排除されるかのいずれかであつた。ディキンスンが敢

えて此の主題を把え，それに真正面から取組んだことの中には，從つて額面以上の意味が潜んでいることが察せられる。つまり，成功は，決して成功しない者にだけ，最も純粋に，而も劇的に其の実体，其の價値が啓示されるという，常識的な意味での成功の否定は，否定する事自体によつて成功への關心を肯定していると言える。而も，詩人としての此の世的成功を具体的な生活で完全に否定し，極度の隠遁の中に身を守つて行こうとする彼女の人生姿勢とを見比べる時，彼女は外形的には此の世からの逃避，此の世との隔絶の生活にあつても，その中に唯一方的に沈潜し，内面深く見つめるというのではなく，其の眼は逆に，此の世的な華やかな成功へ向いていたことが想像される。

2

成功に關する逆説，延いては，デイキンスンの本質の一つとしての逆説を解明するのに，その逆説の成立構造，過程には次に述べる数段階があるものと想定して，考察を進めて行きたい。

第一の段階は，肯定か否定かの不安，前掲の詩を例にとれば，成功か失敗かと云う相對する二元間のサスペンスの状態である。此のサスペンスの場を形成するものは，デイキンスンの人間としての肯定への激しい欲求と，それに對する他者の否定との力關係に他ならない。此の云わば dualism は詩人デイキンスンの基底を成している図式とでも言えよう。詩の發想，心象の形成にあたつて，彼女は屢ね，此の dualism の単純な図式の上に立つ。其處から生ずる不安，希望，葛藤，幻滅といつた種類の，心理の細い動きの描写がデイキンスンの詩を性格づけている。これは (2)Richard Chase が kinaesthetic という言葉を當て，(3) Spiller が her extraordinary seizure in art of the apexes of despair and ecstasy という所のものであつて，絶望と恍惚という二極間に，考えられるあらゆるシエードを有つたものが唱われていると言えよう。「希望とは魂の中に

止まる羽毛を有つたもの…」(p.18) とか,「希望とは靈妙な大食漢…」(p. 45) 等と,希望に關する詩の多いこと, joy, exultation, ecstasy, rapture, delight, transport 更に,それに對するものとして pain, agony, anguish, affliction, throe とかゞ詩の中に好んで用いられていることは,詩の主題なり,狀況なりが,其の両極間のサスペンスとして把えられていることに起因している。其の時,此の詩人の心は肯定へ向いた姿勢で二極間の何處かに位置し,而も微妙な搖れ,動きを経驗していると解釈出來よう。

然し,成功對失敗という二元關係が人間生活に於いて最も端的に表われるのは,生か死かという問題である。把えられた對象を究極の所迄突詰めずには居れない,問題の本質への鋭い透視眼を備えている此の詩人が,生か死かというサスペンスの狀態を度々設定するのは寧ろ當然と言えよう。次にその例をあげるならば,

Elysium is as far as to
The very nearest room,
If in that room a friend await
Felicity or doom.

What fortitude the soul contains,
That it can so endure
The accent of a coming foot,
The opening of a door! (p. 132)

(極楽は
直ぐ隣りの部屋程近い
若しその部屋に友が
至福か絶望かを待つのであれば

人の心は何んと勇気のあることか
それはじつと堪える

近づく足音と
ドアの開くのを)

又，死に關する詩の一部に，死は

(4) Staking our entire possession
On a hair's result,
Then seesawing coolly in it
Trying if it split.

(吾々のすべての所有を
髪の毛一本の結果に賭けて
それがプツンと切れるかどうか
冷酷にも上下させてみる)

ものだとする。彼女が此の様な生か死かのサスペンスに如何に魅せられていたかは，

1. As he, defeated, dying (p. 1)
2. I've seen a dying eye (p. 169)
3. Was dying as he thought, or different (p. 170)
4. Except the dying; this to us (p. 171)
5. 'Tis dying, I am doing; but (p. 175)
6. The dying need but little, dear,-- (p. 220)

という具合に dying の状態が度々取材されていること，又，全体の作品の略四分の一を占める死に關する詩の多くが，死の前後の異常な緊迫感を病的な程に追求していることからも十分に窺える。

次に，逆説への過程の第二段階として考えられるのは，前述のサスペンスが破れ，両極のいずれか一方に歸趨する状態である。そして其處で得られる成功は，単なる成功ではなく，前提となるサスペンスの中にあつては其れに相對する失敗も同じ程度に味わずには濟まされないから，特に強烈に感覚される。更にもつと積極的に，成功か失敗かのサスペン

スが一度，失敗に歸着し，其處から更に成功へと飛躍する状態を設定し其の時に初めて成功の真價が味わえると，彼女の詩は主張する。云いかえれば，ある對象なり，現象の價値が最も強烈に，鮮明に感覚されるのは，一度それから否定され，そして其の次に，又は次の瞬間に肯定される時であるとする。前出の詩を例にとれば，失敗，絶望，死を味わつた者にだけ，成功，至福，生の甘美さ，無限の歓喜が知らされるという。次に此の段階にある例をあげてみよう。

Who never lost, are unprepared
A coronet to find;
Who never thirsted, flagons
And cooling tamarind. (p. 19)

(一度も亡くしなかつた人は
冠を見つける資格が無い
一度も咽喉が渇いたことがない人には
葡萄酒だの涼しいタマリンド樹は駄目)

という第一連で始まる詩や，

For each ecstatic instant
We must anguish pay
In keen and quivering ratio
To the ecstasy.

For each beloved hour
Sharp pittances of years,
Bitter contested farthings
And coffers heaped with tears. (p. 21)

(恍惚の各瞬間の為には
苦悩を支払わねばならない
恍惚に対しては

きびしいふるえるばかりの比率で

最愛の各時間の為めには
長年こすくして貯めた金
口汚く言い含つてまけさせた端金
それから涙ながらに積んだ富を）

等によつて代表される一群の詩は，此の第二の段階を鮮やかに示して呉れる。「冠」の尊さ，「葡萄酒」の美味しさは，それらのものから遠ざかつた所からの烈しい追求に在るし，「恍惚の瞬間」と云い，「最愛の時間」と云い，其の對稱的なものを強く経験した後で初めて其の意義が確立され，其の真價が味得されるという。而も，それが反比例という相關々係にあること，從つて償いの考えが包藏されていることは次にあげる例によつても明らかである。

Though I get home how late, how late!
So I get home, 'twill compensate.
Better will be the ecstasy
That they have done expecting me,
When, night descending, dumb and dark,
They hear my unexpected knock.
Transporting must the moment be,
Brewed from decades of agony!
..... (p. 26)

（どんなにどんなに遅く家へ帰つても
家へ帰ればそれで帳消し
皆んなが私を待ちあぐんで
夜のとばりが音もなく降りて暗い時
不意に私のノックを聞くと
その有頂天はもつと素晴らしい

それこそ何年もの苦悩で醸し出された

無我夢中の瞬間…… ……)

然し，最大の喜びが最大の悲しみの後で味われるという，これらの詩に共通した公式は所謂，常識であつて，決して逆説とはなり得ない。常識の否定から逆説が始まるからである。それにも拘らず，これらの詩は次の逆説の詩への過程として不可欠な意義を有つ。というのは，第二から第三の段階への飛躍は，他の条件を固定した儘で，時間だけを移動させることによつて可能になるからである。則ち，最大の喜びと最大の悲しみとが時間の流れの中に前後して把えられたのが第二段階であり，それを同時に把えたのが第三段階，つまり次に説明する逆説になると考えられる。

デイキンスンは，成功と云い，至福と云い，或は生と云い，冠と云い其の價値をすべてそれが得られた際の感覚に置く。然し，感覚は必竟，時間と共に鈍り，初めの強烈さは次第に薄れ，新鮮さは色褪せて行く。

While I was fearing it, it came,

But came with less of fear,

Because that fearing it so long

Had almost made it dear.

There is a fitting a dismay,

A fitting a despair.

…… (P. 49)

(それを恐れている中にそれはやつて來た

だが來たらそれ程恐ろしくはなかつた

あまり長い間恐れていたので

殆んど親しくなつてしまつていたからだ

驚きに順応があり

絶望にも順応がある……)

で冶まる詩には，人間の感覚が本質として有つ，順応による無感動化，そしてそのことへの失望が唱い込まれている。そうなると感覚の強烈さ，新鮮さ，横溢する生の実感を持續させ，それを享受して行く爲には一つの方法しか残されていないことになる。則ち，もう一度自己を否定して「咽喉の渇き」を覚え「苦悩に」打ち拉がれ乍らも堪えて，其處から又肯定へと飛びつくことである。前述の詩を例にとれば，「いくら遅く家へ歸つても」，家に歸りついたのは既に一つの行爲の結末であつて，其處に惹起された有頂天も其のほどぼりは冷めるばかりで，それをもう一度新しくする爲には，彼女は又しても家を出て暗がりの中を彷徨う他はない。これは果しない反復を意味するだけである。

ディキンスンは此處で，更にもつと問題の内奥に入つて，存在というものゝ本質にある驚くべき真理を実鋭な感覚で探りあてる。則ち，感覚の順応による無感動化だけではなく，此處で得られた「肯定」そのものが本質として「否定」への方向，或はもつと積極的に「肯定」の喪失を伴うことに彼女は気がつく。

(5) Perception of an
Object costs
Precise the Object's loss.

(ある物を把えると
その代償として　まさしく
その物が失われる)

然し，ディキンスンが執拗な迄に激しく求めているのは，肯定と否定との間斷ない反復の連續ではなく，ましてや肯定による肯定の喪失でもない。それは，感覚の鮮明さ，強烈さが一種の恍惚状態として永續することである。

(6) If I read a book and it makes my whole body so cold no fire
can ever warm me, I know that is poetry. If I feel physically

as if the top of my head were taken off, I know that is poetry.
These are the only ways I know it. Is there any other way?

という彼女の特異な「詩」の定義は(7)Mark Van Doren も言つている様に，詩人にとつては他でもない「生」の定義である。そして此の様に激しい「生」の実感は，詩の随所に見られる ecstasy, rapture, transport が確約され，生が衰えることなしに強烈に燃焼しつゞけて初めて可能である。云いかえれば，前述の「最愛の時間」，「恍惚の瞬間」が恒久的に約束される時に他ならない。こうしてみると，其のことが可能なのは，此の詩人にとつては，逆説以外にあり得ないことになる。其處からディキンスンの逆説が生まれる。則ち，其の時，自らを否定して置くことによつてそれが肯定に直結するという超論理が，此の詩人の中に実感として成立するのである。これが，冒頭に掲げた「成功」に關する詩に明確に述べられている逆説へ直接に繋がる。否定と肯定とが相關的に把えられるのではなく，両者が其の間の距離を失つて，一つのものゝ表裏として把えられ，而も彼女が否定の側に在るという状態である。其の時に初めて，肯定による感動，感覚の順応や摩滅も無く，又肯定の爲の肯定の喪失も無しに，意志の世界で自らを否定の中に置くことによつて肯定が逆説的に確約されることになる。前述の詩を例にとれば，「恍惚の瞬間」は「苦悩」の中にあつて，而もその中に止まることゝ同時に享受されることになるし，「吾が家」に歸らずに暗りの中に佇むことによつて同時に，家へ入る時の「有頂天」を感覚し續けるというのである。

肯定そのものよりか，否定こそがより大きい肯定であるという逆説的な考え方は，先づ次にあげる詩の中にその片影が認められよう。

Forbidden fruit a flavor has
That lawful orchards mocks;
How luscious lies the pea within
The pod that Duty locks!　　(p. 46)

（禁じられた果物の有つ薫は
普通の果樹園どころの比ではない
義務が錠をかけた莢の中にある豆は
何んと旨そうなことか）

更に，

The thought beneath so slight a film
Is more distinctly seen——
As laces just reveal the surge,
Or mists the Apennine. (p. 23)

（極く薄い膜をかぶつた考えは
却つてもつとはつきり見える
レースが却つてうねりを見せ
霧がアペナイン連峰を現わす様に）

其の他，Undue significance a starving man attaches…… (p. 37) は「飢えた人は遠くにある食物に異常な意義を感ずる。彼は溜息をつく。だから望みがない。そして，それ故に美味しいのだ。食べると飢えは軽くなる。だが，食べると旨味が飛んで行く。美味しいのは距離だつたのだ。」更に，I had a daily bliss… (p. 58) To lose thee, sweeter than to gain… (p. 154) も其の好例と言えよう。これらの一連の詩の基調となつているものは，自己と對象との間に距離を保つことによつて，そして其の時だけ，其の對象が得られるのだと云う逆説である。

彼女は更に，一定の距離を保ち，自己を對象から遠ざけると云うよりか，もつと積極的に自己を否定し，反對の状態へと追いやる。その時にディキンスンの逆説が完成され，從つて彼女の「生」が確約される。前述の「成功しない者だけが成功を知り」，「敗戰の惨めさを味わう者だけが真の勝利を享受する」という逆説の典型も此處で成立する。

Delight becomes pictorial
When viewed through pain,--
More fair, because impossible
That any gain.
..... (p. 25)

(歓びは苦痛を透して眺めると
絵の様になる
手に入れようとしても不可能だから
尚更美しいのだ)

と，彼女は此處で，歓びは遠くから眺めるだけでなく，却つて苦痛の中からみた方がもつと素晴らしいと斷定する。又，Much madness is divinest sense (p. 8) では「ものわかりのある眼には狂気はもつとも素晴らしい心，思慮分別はひどい狂気と映る」と，彼女の世界に於ける價値観は此の世のものと全く逆向きのものであることを唱い，其の他 A wounded deer leaps highest (p. 6)「傷ついた鹿は最も高く跳ねる」，To fight aloud is very brave (p. 11)「声をはりあげて戦うのはとても勇ましいが」A death-blow is a life-blow to some (p. 184)「ある人にとつては死の打撃は生の打撃」等の詩でも同様に，逆向きの價値が明確に唱いあげられ，そしてそれと同時に，逆説的な意味での真実の「生」が高揚されている。

3

此處で，デイキンスンがどの様な実生活をしたかを概観してみることは此の問題に何等かの示唆を與えるのではないかと考えられる。というのは，第一に，女性として思想の深みよりか寧ろ感覚派的であることが想像される。言いかえれば，現実生活が其の儘の形で詩に唱いこまれることが多いこと，第二に，彼女が周知の様に極端に狭い生活範囲の中に

特殊な生活を送つたこと，第三には更に決定的なことゝして，彼女にとつて詩は何ものかを表現するものではあつても，他へ伝達する爲の手段ではなかつたこと，これらのことからして，詩作の視点が例外なく第1人稱に固定されていることでも分る様に，彼女の人生姿勢がその詩に単純な關係で投影されていることが十分考えられるからである。

彼女にとつて，父は當時のピユリタニズムの云わば象徴であた。少女時代に書かれた手紙は，一例をあげれば

(8) My heart grows light so fast that I could mount a grass-hopper and gallop around, the world, and not fatigue him any!

という様に，人一倍に茶目な，悪戯つぽい少女を想像させる空想と妖精的な思いつきに満ちているが，彼女生來のその様な夢と感受性，それから父ゆずりの独立心にしても，ピユリタニズムを背景とする，父の權威を中心とした家庭生活の中では窒息する他はなかつた。

(9) …We do not have much poetry, father having made up his mind that it's pretty much all real life. Father's real life and mine sometimes come into collision but as yet escape unhurt.

とか

(10) Father was very severe to me.

とかと，手紙の中に，父に對する疑惑や非難が述べられている。然し，當時は社會的な制限もあり，彼女が家を去る等ということは到底考えられない。結局は，此の父のものに忍從することになる。一方，家庭外はというと，相互に思いを寄せた牧師ウオズウオースは既婚の故に西部へと姿を消し，彼女が秘かに慕つていた家庭教師レオナード・ハンフリーも，又，父の法律事務所の手伝いをしていたベンジヤミン・ニユートンも数年の間隔を置いたゞけで，若い彼女に先立つて死んでいる。そして彼女はこれを機にして恋愛や結婚の具体的な問題からきつぱりと自己を斥ける。外面的な自己表現，自己拡張への激しい意欲にも拘らず，社會

的，家庭的な絆に縛られて，結局は家事の手伝い，やがては，母の老衰に伴つて家事をきり廻し，仕事が終れば二階の自分の部屋にひきこもるという，對社會的な何物も介在しない特殊な生活が續く。又，詩の出版に關しては，彼女の手紙は，(11)生前發表の機會に恵まれなかつたのは自分のねがう様な条件で出版することが出來なかつたのが其の理由であることを伝えている。つまり，世間的な名声や榮誉への生來的な否定の態度ではなく，彼女の意志による一種の放棄とみなければならない。

此の様に観てみると，彼女の生活に織りこまれている特有の反応形式又は人生のパタンとも云うべきものが抽象されて來ることに気がつく。つまり，

肯定への激しい欲求—外界からの拒否—意志的な否定

というパタンが繰返されているとみていゝ。そして，此處に，前述の詩に現われた逆説と直結する点が在る。則ち，右のパタンの「意志的な否定」は単なる否定ではなく，逆説的に肯定につながる否定に他ならない。其の時に，此のパタンが完成されるのである。例えば，父との關係にあつては，彼女が現実の父を強く否定し，而も其の下に抑圧されていることによつて，父というものゝ真のあるべき像，その價値を永續的に味わつて行く。恋愛は，恋愛の完成ではなく，失恋に於いて初めて，その甘美さが何時迄も新鮮に感覚される。結婚も同様，結婚をしないでいることによつて，結婚の價値を最もよく知り得る。詩の出版については，それを放棄，否定することによつて，此の世的名声の素晴らしさが解る。又，世間を放棄して初めて，人間世界の有つ魅力が消えないで濟むことになるというのである。

4

上に述べた様な人生のパタンとして明瞭に把えられる逆説的な思考態度，詩に繰返されている逆説的な發想がどの様なものに由來しているか

を考察してみよう。

第一に考えられるのは，彼女の内的な条件としての真実なものへの激しい欲求，真実なものへの尖鋭な感覚である。

I like a look of agony,
Because I know it's true;
Men do not sham convulsion,
Nor simulate a throe.
..... (p. 168)

(私は苦悶の表情が好きだ
それは本物だから
人はひきつけを装つたり
激痛のふりなんかしないもの……)

で始まる詩や，

Much madness is divinest sense
To a discerning eye;
Much sense the starkest madness.
'Tis the majority
In this, as all, prevails.
Assent, and you are sane;
Demur,-- you're straightway dangerous,
And handled with a chain. (p. 8)

(ものわかりある眼には
狂気は最も素晴らしい心
思慮分別はひどい狂気と映る
何事でもそうだが
勝を制するのは大多数
はいはいと同意すれば貴方は正気
異議を唱えてごらん——

貴方は直ぐさま危險な人として
鎖でつながれます)

等によつて鮮やかに示される様に，詩の背後には彼女の真実なものへの飽くことを知らない追求，真理への凝視が感じとられる。この内的条件が，頑固な父から受継がれた独立心に裏打されて，真実以外のものへの反逆となる。そして真実以外のものが，歴史的な意味で疊みかける様に彼女の廻りに迫つて來ていた。

ピユリタニズム文化がニユーイングランドに於いて衰微し始めていたと云うことがデイキンスンの詩の一つの契機であり，詩を性格づける大きな要素の一つとなつているという (12) Allen Tate 以來の観察は，此處でも其の儘あてはまると言えよう。彼女の置かれてあつた歴史的な場にあつては，真理を明確に掲げようとする場合，過去から受継がれ，衰微しつゝある理念なり，教義なりの外形は往々にして醜く見える。其の時真理を確立するのには，常識化，固定化された旧いものゝ外殼を打破る所から始められるのは當然であろう。而も，價値観の転換，新しい意義の高揚の爲には，人の心をゆさぶる一種のエモーショナルな衝撃が必要になる。逆説は此の様な状況にあつて生まれると考えられる。此の点で新約聖書に記されているイエスの言葉の有つ逆説とデイキンスンのそれとが多くの並行關係を示すことは興味深い。イエスの場合，既成のものはユダヤ教であり，それが柔軟性を失つた戒律の形をとつて人々を縛る。一方，ローマによる政治的な重圧も彼等の上に容赦なく加えられている。此の様な状況にあつて，歪んだ旧い價値観を破り，真理を打出す時，言葉は必然的に逆向きの意味をもつて人の心に響びいて來ることになる。他方，デイキンスンの場合，既存のものはピユリタニズムでありこれが同様に，唯に戒律的なものとして彼女に迫る。生命を失いつゝあつた當時のピユリタニズムの文化は，人間的な温かさと，偽善への病的な程の嫌悪とを基底とするデイキンスンの世界とは凡そ逆向きの關係に

あつたと考えられる。其の時，デイキンスンの正説は逆説とならざるを得なかつたのである。

逆説は，本質的には，前述の様な状況にあつて必要とされる一種の衝撃であつて，新しい理論の展開を目的とするものではない。それは，人間性の更に深い所から湧いて來る本然的な欲求，直観的な叫び声に近い。だから他のものゝ論破とか，自らのものゝ説明も無しに，唯一方的にぶつつけることになる。推敲を経た修辞，詩的洗錬さは二次的なものとして差置かれ，表現は往々にして極く生の，飾らない，ぼきぼきしたものとなる。そして，それだから却つて逆説の効果が強められる。それは，イエスの山上の崇訓に徴しても明らかであるし，又其の意味で，デイキンスンの簡潔，直截そのものゝ表現が，逆説を盛りこむのに最適の詩型と言える。

前述の「成功」の詩を例にとれば，Success is counted sweetestという第一行目は其處で切れていることが逆説の効果の上で絶對に必要である。第一行目によつて引起される情緒の流れの方向，或は予想は，読者の眼が次の第二行目に移る迄の時間，其の儘の状態で保たれる必要がある。その時，第二行目 By those who ne'er succeed への移行に際して，情緒の方向は戸惑い，予想は裏切られる結果となる。第一行目と第二行目との順序が逆になると，意味は全く同じであつても，詩の生命は全く断切られることになる。これと全く同様のことが，次にあげる詩の夫々の第一行目，第二行目について言えよう。

1. Elysium is as far as
   The very nearest room
2. For each ecstatic instant
   We must anguish pay
3. The thought beneath so slight a film
   Is more distinctly seen

4. Delight becomes pictorial
When viewed through pain

これに關連して，イエスの山上の崇訓の「幸福なるかな，心の貧しき者…」という語順と云い，幸福な者の定義付けを冒頭にして置いて其の後で「天国はその人のものなり」という方式と云い，デイキンスンの逆説詩の表現形式と照応して興味深いものがある。

當時のピユリタニズム文化への非難は前にも触れたが，その外殼に向けられたものであつて，デイキンスン自身がその中に育てられたことから來るピユリタン的な信仰を基底とした思考態度は，実は彼女の逆説を生む母体であつたと言えよう。信仰それ自体が逆説的な價値体系であるからである。その意味で，聖書の有つ，逆説的な發想への強い影響を閑却することは出來ない。家庭教育，教會生活，神学校生活，更に隠遁生活を通して，聖書は彼女にとつて魂の救いであつたと同時に，詩的心象の盡きない宝庫，逆説的な強い表現法の云わば教科書であつたと考えられる。

5

一見，不可解とも思われるデイキンスンの隠遁生活は，此の様な逆説の立場から考えると，彼女が必然的にとらざるを得なかつた姿勢，又彼女が自ら進んで沈潜した世界と解釈出來るのではなかろうか。又，その様な特殊な生活への動機は，一つの謎として多くの推定が爲されているが，ウオズヴオース牧師との失恋とか，親友の死とかと云う様な何か特定のものではなく，種々の苦い人生経験の中に次第に身につけた逆説的な「生」の場への安住にあつたと考えられよう。つまり，前述した人生のパタンに見られる様に，生活と思想とが相互形成的に生み出したものが逆説による價値基準なのであつて，その行きつく所は，彼女の生活それ自体が一つの組織として逆説となる場，つまり隠遁の生活を置いて他

にはなかつたと解釈出來る。

(13) Take all away from me
But leave me ecstasy,
And I am richer then
Than all my fellow-men.
Is it becoming me
To dwell so wealthily,
When at my very door
Are those possessing more,
In abject poverty?

(何もかもあげましよう
だがエクスタシイは駄目
それだけで私はどんな友より
もつとお金持ち
他でもない私の戸口で
もつと沢山物を有つている人達が
ひどく貧しくしているのに
私がこんなに豪華にしていられるなんて
私に応わしいかしら)

という詩の中には，ディキンスンの隠遁に於ける逆説が集約されている。生命燃焼がその輝きを増す爲には周囲が暗くなければならない。彼女が隠遁，閉鎖，隔絶という様な否定的な人生態度をとればとる程ecstasyの輝きが増して來るのであつた。

更に純粋な生の実感，生そのものゝ充足の爲には，単に此の世から隔絶するだけでは十分ではなかつた。その追求の執拗な余り，彼女が憑かれた様にして死への思いに沈潜し，其處から，きらきら輝くばかりの生の断片を無限に得ようとしていた。隠遁の生活にあつては，人間と人間

との横のつながりは詩に唱われる程の大きな感動とはならずに，自己とその行末，つまり死というものが決定的な關心事であつたことは十分領けよう。然し，全体の四分の一の詩が直接に，又は暗示，象徴として死と真向から取組んでいることの背後には，それ以上のことが無ければならない。則ち，彼女にとつて死は至高の苦痛であり，絶望であり，永遠との神秘的な接触点であつた。そして，死が絶對的な苦痛であり，絶望であることを意識することによつて，彼女は生のこみあげる様な実感をわがものにしていたと考えられる。從つて，詩の中に見られる死の讃美や死への親近感は，生の否定に根ざしているのではなく，生の執拗な迄の肯定を逆説的に追求している姿と解釈しなければならない。

（本学助教授）

註

(1) Richard Chase: *Emily Dickinson*, p. 288

(2) ibid. p. 232

(3) Spiller: *Literary History of the United States*, p. 907

(4) Henry W. Wells: *Introduction to Emily Dickinson*, p. 78

(5) Spiller: *Literary History of the United States*, p. 911

(6) *Letters of Emily Dickinson*, p. 265

(7) ibid. p. 9

(8) ibid. p. 89

(9) ibid. p. 101

(10) ibid. p. 87

(11) スピラー「アメリカ文学の展開」p. 188

(12) Richard Chase: *Emily Dickinson*, p. 61

(13) *Letters of Emily Dickinson*, p. 362

引用詩につけた頁数は *Selected Poems of Emily Dickinson*; The Modern Libraryによる。